
境界遊戯

腐れ大学生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

境界遊戯

【Nコード】

N6777M

【作者名】

腐れ大学生

【あらすじ】

この世界、特に日本にはいたるところに境界が存在します。

例えばあなたの部屋と他の部屋を隔てる壁だとか、道路の対向車線同士を区切る白線だとか。

大抵の場合、あなたはその境界の向こう側にあるものが見えているか、もしくは向こう側に何かがあるか知っています。

それが真実であるかは別にして。

その境界を越えたとき、向こう側にあるものは本当にあなたの見えていたもの、知っていたことなのでしょうか。

これは、そんな境界で遊ぶ物語。

序章（前書き）

二作目の投稿となります、腐れ大学生です。

今回の話には残酷描写は含まれていませんが、今後含まれてくる可能性があるので、苦手な方はお気を付け下さい。

序章

私、日下波奈は、気持ちを浮つかせておりました。

というのも、明日からいよいよ夢の一人暮らし、そして薔薇色のキャンパスライフが始まるのです。

辛い受験戦争を耐え抜き、私は今見事に人生の絶頂期へと上り詰めたのです。

これから私が生活をする部屋には、配達業者によってすっかり荷物が運びいれられ、後は私が迫りくるダンボール箱をバツバツサと切り倒し、中身を整理するだけといった手筈なのです。

しかし、私の両の瞳は確かに倒すべき箱共を見据えているのですが、私の意識は既に愉快的なキャンパスライフへと飛んでいました。

学友と切磋琢磨し、気の置けない親友とお酒を飲み、もしかすると大人びた先輩との、素敵な恋なんかもあるかもしれない。

ああ、素晴らしき哉！大学生活！

などと考えているうちに眠ってしまったのか、外は随分日が傾いているようでした。

起きたばかりなせいか、意識がはつきりせず、まだ頭が回りません。

しかし私は焦らないのです。何を隠そう、私はこの寝起きのまどろみの時間が大好きなのですから。

この意識がどろどろになって、周囲に溶け出すような感覚は、なんだか自身が空間と一体になったような気分させ、私を虜にするのです。

私はしばしの間、このぼわぼわとした感覚を楽しんでいましたが、いい加減に頭も働きだして、まどろみとの逢瀬も終わりました。

私は携帯を取り出し、開きました。時刻は午後五時。受信メールが一件ありました。

送り主は母。内容を要約すると、部屋の様子はどうか、荷物の整理はしたか、御飯は三食必ず食べなさい、といったものです。

私はそれなりに妥当な内容を返信した後、少し早めの夕食を取ることにしました。

夕食は近隣のコンビニで買っておいたおにぎり二つ。

鮭とたらこ、両方を平らげた私は、一息ついた後に部屋の整理に取り掛かることにしました。

とはいっても敵は強大。私はこのダンボールの密林をいかにして平地にするか、思案しました。

そして出した結論は、片っぱしから切り開くこと。

私はカッターの刃を押し出し、ダンボールを拘束する紐へと躍りかかったのです。

しばらく孤軍奮闘を続けた私。あたりには無残にも開かれたダンボールの残骸。

私は肩で息をつき、一旦作業を終了することとしました。

「今日はこのくらいにしておいてやるよ！」

捨て台詞を吐くことも忘れません。様式美は重要なのです。

先ほど荷物から引きずり出した時計を見たところ、時刻は午後十時。なんと荷物の整理を五時間も続けていたことになりました。

外を見ると、既に日はとっぷりと暮れ、部屋の明かりに魅入られた虫が窓ガラスにぶつかって、時折ピシリと音を立てています。

ダンボールとの奮闘で疲れ切ってしまった私は、早々に眠ることにしました。

明日は早いのです。初日から遅刻しては冗談にもなりません。

布団を引きずり出し、布団を敷くスペースも見当たらない床に無

理やりに広げました。

ダンボールに囲まれた布団は、なんだか安心感があって意外なほどに寝心地が良く、目を閉じた私は、五分とかからず夢の世界へと旅立ったのでした。

その日の夜、私は誰かが何かを嘗めるような音で目を覚ましました。

私はまどろみとの邂逅にしばし酔いしましたが、そのうち異変に気付きます。

私は一人暮らしを始めたのではなかったか、と。

ならば私は何も嘗めていないのに、部屋の中から何かを嘗める音がするのはおかしい。

当然の推論を頭で組み立て、さらに頭を回転させる。

もしかしたら泥棒の類かもしれない、ならば起きていることを悟られては危ない。

そう思った私は、身じろぎをせず、ひとまず異音の音源を視線で辿ってみることにしました。

部屋は真っ暗ですが、外からの明かりで多少の視界は確保できているのです。

異音は私の枕元からするようでした。

勇気をふりしぼって、そちらに視線を向けます。

すると私の頭の丁度真横に、毛むくじやらの足が見えました。

私は思わず声をあげそうになるのを、何とか堪え観察を続けます。足の形はどうも人のそれではないようでした。全体的に節くれだっており、男性にしては随分と細い気がするのです。

足はその場から微動だにせず、何かを嘗めるぴちゃぴちゃという音は続いています。

一人暮らしの部屋で、得体の知れないものと二人きり。

私は特に幽霊とかそういった類のものを信じているわけではないのですが、この状況は私に恐怖心を抱かせるのに、十分すぎるものでした。

心臓が早鐘のごとく鳴り、呼吸も少し荒くなります。

すると呼吸の音が聞こえたのでしょうか。初めて何者かに動きが見えました。

初めは私の頭に両のかかとを向けていたのに、今はつまさきが両方ともこちらに向いています。さらに、外から差し込むわずかな光が少しだけ遮られたようでした。

おそらくこいつは、私を覗き込むようにして立っているのでしょう。

背筋が冷たくなりました。少し視線を上に向ければ、この得体の知れないものと目が合ってしまうかもしれないのです。

絶対に、嫌だ。

私は頑なに目を閉じて、朝を待つことにしました。

午前六時。いつの間にか眠ってしまったようです。

昨日いたはずの何かはもはや影も形もなく、夢を見たのではないかと思ったほどでした。

布団の枕元に残る足の形のへこみを見るまでは。

それが示すことは、あれが明け方近くまで私の顔を覗き込んでいたということ。

私は鳥肌が立つのを感じました。

私のキャンパスライフは入学式の前からつまずいてしまったようです。

まさか早々に引っ越しを考えることになるとは。

サークルは迅速かつ慎重に選ぶべき

日下波奈は圧倒されていた。熱気すら感じられるほどの周りの雰囲気。

入学式開始三十分前、そこには理想のキャンパスライフを目指す若者たちがひしめきあい、互いに品定めをするようにして言葉を交わしていた。

辺りは会話をする相手を探すギラギラとした視線が飛び交っており、さながら戦場の様相を呈している。

恐らく、ここでつまらないと判断されれば、二度とその相手と会話することはないのだろう。なんて恐ろしい、どうやら理想のキャンパスライフへの道は険しいようだ。

そんな大げさなことを考え、日下は身震いする。

彼女は今、自分でも驚くほどに緊張していた。

「ねえ、あなた体調でも悪いの？ なんだか小刻みに震えているようだけど」

ついに、声をかけられてしまった。日下は平静を装いつつ、相手の顔を見る。

声をかけてきたのは、赤みがかった髪を肩まで伸ばした女性だった。

身長は日下よりも頭一つ分大きい。美人と呼ぶのに差し支えない顔をしており、芯の強そうな瞳からは自分に自信を持っていることが伺える。

日下は何度か、どのような言葉を返すかを頭の中でシミュレーションし、ついに声帯を震わせて言葉を放つ。

「だ、大丈夫でふっ！」

噛んだ。

日下は自身が赤面するのを感じた。相手の反応が予想できていたまれなくなり、思わずうつむいてしまう。

「あははっ」

相手の女性は少しの間あっけにとられていたようだが、日下のあまりの動転ぶりに笑いを堪え切れなくなってしまうたようだ。

女性にからかうつもりはないのだろうが、羞恥を煽られた日下の顔はますます赤くなり、熟れすぎたトマトのような顔色になっていた。

「あなた、面白いね。私は天野咲子、よろしくね」

天野はまだ笑い足りないのか、口元を微妙に震わせながら、日下に白い手を差し出す。

日下は初め、彼女が何を意図しているのか理解できなかったが、彼女が促すようにして手を揺らすのでようやく合点がいき、急いで天野の手を取った。

「あの、はじめまして。日下波奈といいます、ふつつかものですがよろしくお願いします」

「波奈、か。可愛い名前だね。だけどまずは、友達からお願いします」

天野は快活な笑みを浮かべて、つないだ手をぶんぶん振る。天野は女性にしては力が強いらしく、日下は彼女のされるがままとなっていた。

その後、日下は天野と行動を共にすることにした。天野はその見た目からは想像できないほどに博識で、特に日本の神々や妖怪について明るかった。彼女の口から語られる知識の数々に、日下はただ脱帽するばかりであった。

「境界って言うのはね、そこら中に存在しているものなんだ。例えば内と外を隔てる壁だとか、何かを隔てているという概念さえ持っていれば、そこには境界という属性が付与される。もちろん私とあなたの間にも境界はある。あなた側と私側、どちらから観測するかによって、その意味は違ってくるけれどね」

天野が一旦言葉を切る。日下はいまひとつ理解できていないようだったが、話の中にひっかかるところがあったのだろう。天野に対して疑問を投げかけた。

「私と、天野さんの間に？」

日下はおもむろに天野の手を取る。天野は日下の行動の意味がわからないらしく、少し首をかしげた。

「こうして触れられるのだから、私と天野さんの間に、境目なんてありませんよ？」

日下は天野の顔を見上げるようにしてそう言った。

天野は目を丸くした。そのような返答をされるとは思っていなかったのだろう。

ようやく日下の言葉の意味が咀嚼できたとき、天野は呆れたように笑って、日下の少しくせのある髪を撫でた。

「確かに、あなたの前では境界なんて意味をなさないようだね」

「なんだか馬鹿にされている気がします」

日下が拗ねたようにして唇を突き出す。天野はそれを見て、乾いた笑い声をあげると、取りつくろうようにして言葉を続けた。

「別に馬鹿にしているんじゃないよ。それは間違いなくあなたの美点だと思う。ただ……」

天野の目が不意に真剣みを帯びた。

「あなたは少し注意力が足らなさそうだから、忠告はしておくね。あなたなら容易に越えられる境界は無数に存在するだろうけど、越えていいものと、いけないもの。この区別はつけられるようにしておいた方がいいよ」

今度こそ、日下は完膚なきまでに意味を理解できなかった。天野の言葉の意味、それが一体なんのことを指しているのか。

ただ、天野の目があまりに真剣であつたから、曖昧にうなずいておいた。

そのとき、不意に会場内に放送が響く。

「どうやら入学式が始まるみたいだね、行こうか」

天野の顔に快活な笑みが戻っていた。日下は今度は大きくうなずくと、二人で座ることのできる席を探し始めた。

入学式は滞りなく幕を閉じた。その間、日下は何度も意識を手放しそうになったが、その度に天野に頬をつつかれて起こされた。入学式後、二人は昼食をとるために学内の食堂を訪れていた。食堂は外装にこだわっているらしく、レンガ造りだった。日下は

それを見て、以前写真で見たことのあるロンドンの建物を思い出した。

食堂はどうやらバイキング方式のようで、好きな料理を自分で選んでいき、最後に会計を行うシステムのようだった。

「入学式の間、随分眠そうだったけれど、昨日はあまり眠れなかったの？あ、このシチューおいしそう」

天野が日下に声をかけてきた。しかしその目は日下を見ておらず、目前に並ぶ料理に夢中になっている。今気になっているのは、店長お勧めの品であるタンシチューのようだ。

「そういうわけではないのですが」

思い出されるのは昨日のこと。あれは結局、何だったのか。

日下は麻婆豆腐を手に取りながら、昨日の出来事を天野に言うべきか、言わざるべきか迷っていた。

歯切れの悪い返事に、天野は日下に目を向けた。

「どうやら何かあったみたいだね。お姉さんに話してみない？」

天野は気楽に問いかける。顔に浮かんでいるのは、包容力のある笑顔。

日下の口は自然と緩んでしまった。

会計を終えた二人が話すのは、日下の体験した昨日の出来事。

日下は最初馬鹿にされるかと思っていたが、天野は驚くほど簡単に日下の話を信じた。

「それで、その得体の知れないものを見たのは、昨日が初めてなの

？」

「うん、多分昨日が初めてだと思います」

「それは本当に人間じゃなかったの？」

「足は毛むくじゃらだったから、男の人だと思ったんだけど、太さは私よりも細いくらいだったし、あんまり人間っぽくはなかった」

「ふうん、そっかそっか」

天野はうなずきながらシチューをすくって食べている。その姿を見た日下は、これは信じているのではなく、適当に聞いているだけなのではないかと思い始めていた。

不意にカラン、という音が響く。天野がスプーンを置いた音だった。

容器を見ると既に中身は空になっていた。

「さっき、何かを嘗める音で目を覚ましたと言ってたよね」

天野の食事の速さに驚愕していた日下は、突然の問いかけに返事に窮した。

天野は気にせず話を続ける。

「それなら私、なんとかできるかもしれない」

「本当？」

日下は思わずテーブルに乗り出す。今日偶然会ったばかりの女性だが、この奇妙な事件を解決できるというのだ。信じられないのも無理はない。

「本当だよ。ただし今日すぐに、っていうのは無理かな。私にも予定があるしね」

天野は人差し指を立てて、日下の顔の前に持ってくる。

「一日だけ待つて。明日には必ず解決してあげるから」

天野の顔はなぜか余裕綽々で、日下にはそれが頼もしく思えた。日下は目の前の人差し指を握る。天野の指は白く、細かったが、どこか力強い気がした。

「わかった、今日はなんとか我慢するから、明日はお願いね。頼りにしてるよ」

天野は日下の手から指を抜き取ると、照れたように笑う。

「いい傾向だね」

天野は笑ってそう言った。

「それはどういう意味？」

「波奈が私に敬語を使わなくなってきた」

言われて初めて気づく。改めて指摘されると、日下はなんだか恥ずかしくなった。

別に意識して敬語を使っていたわけではないのだが、日下の中には、あまり親しくない人には敬語を使う、という不文律があったようだ。

その不文律が破られたということは、天野は日下にとって少なからず親しい人になったということだ。

「じゃあ、私は少し用があるから。また明日ね」

「えっ、帰っちゃうの」

おもむろに天野が食器を持って席を立つので、日下はなんとか引きとめようとするが、天野は曖昧な笑みを浮かべて行ってしまった。日下は一人で食堂に取り残される。目の前には既に冷えてしまった麻婆豆腐。

目から何かが溢れ出そうになるのを何とか堪え、日下はなんとか冷えた麻婆豆腐を口に流し込むのだった。

学生で溢れる大学構内を日下は歩いていた。特にこれと言って目的はなかったが、あまりあの家に戻りたくないのだ。

サークルや部活の勧誘の人員と思われる学生達が、新入生を狙ってその懷に勧誘のチラシをねじ込んでいる。

日下もその例にもれず、少し歩くだけで手の内のチラシはどんどん増えていった。

日下はこのチラシが全て一万円札だったら、と地に足つかない妄想をしながら、ぼんやりと歩き続けるのだった。

日下はいつの間にか、自分が随分と静かな場所に来ていることに気付いた。

どうやら校舎内に来てしまったようで、辺りに人影は見当たらない。

ふと、目の前の掲示板に目を止める。そこには学校からの告知以外も、ボランティア活動への参加を呼びかけるチラシや、海外留学を勧めるチラシ、そしてさきほど配っていたサークル・部活勧誘のチラシが乱雑に張り付けられていた。

日下は一通り眺めてみることにした。

バスケットボール、サッカー、テニス、吹奏楽、英会話、それぞれが自分たちの特徴や利点を色とりどりの色調で描いてある。

その中で、ひとつ日下の目にとまったものがあった。

真っ暗な背景に、真っ白な字で、ただ歴史民俗学研究部と書かれ

たチラシ。

勧誘する気がないのだろうか。部室の場所どころか、部長のメールアドレスや電話番号といったものも記載されていない。

日下がそのチラシを不思議そうに眺めていると、後ろから不意に声をかけられた。

「その君、我が部に興味があるのかな」

日下はびくりと肩をすくませた後、恐る恐る後ろを振り返る。果たしてそこに立っていたのは、中学生だった。

サークル勧誘と見せかけた宗教勧誘にはご注意を

「それとも、興味があるのは右下の文章の方かな」

日下が返事をしないでいると、中学生は言葉を続けた。

右下の文章？

日下はさっきまで眺めていたチラシの右下を注視する。すると先ほどは気付かなかったが、小さな文字で何か書いてあるのが見て取れた。

怪奇現象の相談、承ります。

書かれていたのはたった一文だけ。

しかし日下はその文章を見て、心を覗かれたような錯覚を覚えた。今自分が悩んでいるのは、まさしく怪奇に関連することなのだから。

「どうやら凶星のようだね。よかつたらこれから部屋に来ない？きつと君の力になれると思うよ」

少年は爽やかな笑みを浮かべて、日下に問う。その表情は年相応の無邪気なもので、その手の趣味がある女性が見たなら、垂涎することだろう。日下は生唾を飲み込んだだけなので、まだセーフとしておく。

少年の誘いは願ってもないものだった。本来なら行くかどうか悩む必要すらない。今の日下は藁にもすがりたい気持ちなのだ。わざわざチラシにこんな文章を載せているということは、この部はそういった現象に関して、それなりに経験を積んでいるのだろう。相談してみる価値は、十分にある。

しかし、日下の頭には一つ引っ掛かっていることがあった。
天野のことである。

彼女は明日必ず解決してくれると言っていた。
ここで彼についていくということは、彼女に対する裏切りになり
はしないだろうか。

日下の中では、できるだけ早く解決したいという気持ちと、天野
の気持ちを無為にしたいくないという気持ちがせめぎ合っていた。
そんな彼女の背を押したのは、目の前の少年の言葉だった。

「何をそんなにためらっているのかは知らないけど、あまり怪異を
侮らないほうがいい。君が出遭ったものがどの程度危険なのかは、
話を聞いてみないとわからないけど、手遅れになってからじゃ、僕
達でもどうしようもないんだよ」

少年は手遅れ、と言った。
それがどのようなことを意味するのか、日下には考えられなかつ
た。

いや、考えたくなかったのかもしれない。

「あの、お話聞いていただけますか」

気付けば、日下の口について言葉が吐きだされていた。

天野に対して後ろめたさは感じているものの、やはり早く解決し
たいという気持ちが勝ったのだ。

しかし、日下はその判断を少し後悔した。

日下の言葉を聞いた少年が、先ほどまでの爽やかな笑みとは打つ
て変わって、口を三日月の形に捻じ曲げた、気味の悪い笑みを浮か
べていたから。

「もちろんだよ。そうと決まれば善は急げだ、部室に案内するよ」

少年はさつさと歩き出してしまふ。平生からの癖なのか、その歩調は妙に速く、日下は急かされているように感じた。

話を聞いてもらつと言つた手前、ついて行かないわけにもいかない。

日下はしぶしぶ前方の小さな背中を追うことにした。

「そう言えばまだ自己紹介をしていなかったね。僕は堀田正義。どうぞお見知りおきを」

「日下波奈と言います。よろしく願います」

「日下さんか、そのスーツからして新入生かな。そういえば今日は入学式だったよね。」

部室に行くついでに、校舎の案内でもしておこうか」

そう言つて堀田は、窓の外を指さした。その先にはシロップのよな白さの、比較的新しい建物があつた。

建物は四階建てと言つたところだろうか、脇には鉄骨製の非常階段が備えられている。

屋上にはフェンスが張り巡らされており、日下のいる場所からはその様子を詳しく伺うことはできないが、巨大な扇風機のような羽がくるくると回転しているのだけは見る事ができた。

「あれは五号館。一年前に建てられたばかりの、新校舎だ。屋上にタケコプターみたいなのが付いてるけど、別に飛べるわけじゃない。あれは風速を計るための装置らしいよ」

「五号館の奥に、オンボロの六号館があつてね、理系の学部の専門科目は基本的にこの二つの校舎で行われるんだ」

「今私達がいるのは、何をするとところなのですか？」

「ここは四号館で、隣の三号館と合わせて共通教育棟と呼ばれている。要は教養科目を受講する校舎だね。一年生の授業は基本的にこ

こでするから、早めに構造を把握しておいた方がいい」

「後は一号館と二号館があるんだけど、この二つは文系の学部の授業があるところ。」

僕は人文学部だから、そこで勉学に勤しんでいるのだよ」

堀田は顔に胡散臭い笑みを張り付けたままで、悠々と歩く。いつの間にか、その歩調は緩んでいた。

二人は渡り廊下へと差し掛かっていた。簡易な屋根を備えたただけのものであったが、雨の日には重宝することだろう。

「この廊下を渡った先が、三号館。目指すべき僕達の部室は、三号館と二号館の間のプレハブ小屋だからもうすぐ着くよ」

ここまで歩いてくる間に、日下は自身が大きな勘違いをしているのではないかと思い始めていた。

目の前の少年が妙に大学の校舎に詳しかった辺りから違和感を覚えていたのだが、先ほどの少年の、自分は人文学部に所属しているという発言で、疑念は確信に変わった。

「もしかして、あなたは中学生ではないのですか」

「はい？」

堀田は急停止し、振り返る。胡散臭い笑みがひきつっている。どうやらかなり動揺しているようだ。

「いやいやいやいやおかしいよね。僕最初から先輩っぽい雰囲気醸し出してたじゃん？ 中学生的な要素は一切なかったよね。幼さゆえの弱さなんて皆無だったよね」

「容姿が完全に中学生でした。頑張って大人ぶってるようで、可愛かったです」

「大学生だよ！今年で二年だよ！酒も飲めるよ！」

「お酒を飲んだら大人だと思ってるあたりが可愛いです」

「何この子、もうミステリアスな雰囲気ぶち壊しだよ。ジェノサイドだよ」

気味の悪い笑みはすっかり吹き飛び、涙目になる堀田。

普段から気にしていたことなのだろうか、日下の言葉は堀田の心を掘削機のごとく抉ったようだった。

「ともかく、僕はもう今年で二十一だ」

そう言っただけ堀田は財布から免許証を取りだし、日下の眼前に突き付ける。必死だった。

免許証まで見せられては、信じるしかない。

「騙しましたね！」

「もうやだこの子……。何でそんな残念そうな顔してるの」

日下との会話を諦めたのか、堀田はとぼとぼと歩き始めた。その後、部室に着くまでに堀田が口を開くことはなかった。

トルコアイスっていつの間になくなったよね

三号館を抜け、二号館への渡り廊下を東に逸れたところに、そのブレハブ小屋はあった。

黙り込んでいた堀田と名乗る男は、小屋の前で立ち止まるとようやくその口を開いた。

「ここが、我が部の部室だよ」

小屋の屋根は平面で、白色の壁には申し訳程度に小さな窓がいくつか付いているが、校舎と校舎の間に挟まれているため、あまり日当たりが良いとはいえないようだ。

部室の扉は引き戸になっていた。扉には小さな南京錠がついていたが、かなり錆びびついているようで防犯性能には甚だ疑問を残す。南京錠は今、開いている。どうやら中に他の部員がいるようだ。

「佐野、新しい部員を連れて来たよ」

堀田が聞き捨てならない台詞を吐きながら、部室の扉を開く。怪奇現象の相談をしに来たはずが、いつの間にか入部希望者になっていた。日下は内心憤慨したが、堀田が可愛いので許すことにした。

部室の中の設備はなかなか充実しているようだった。

部屋は十畳ほどで、床は固い絨毯のようになっており、ざっと見ただけでもクリーム色の大きなソファやホワイボード、折りたためるタイプの机やパイプ椅子といった備品が確認できた。

日下が歴史民俗学研究部におけるソファの必要性について考えていると、当のソファから気だるそうに人影が起き上がった。

どうやら今まで眠っていたらしく、大きなあくびをしながら、瞼をこすっている。

「ふああ、おはよう諸君。新入部員とは、スーツの彼女のことかな、名は何という」

「おはようございます、日下波奈です。でも新入部員ではありませんせんよ」

「波奈か、実に良い名だ。名前とは単純明快なものが一番良い。奈という字は一目で女性の名であると分かるし、名前全体で見ても、日の下の花とは洒落が効いている。貴君の両親は、随分と頭をうねらせて名を考えたのだろうか」

男は最も重要な部分を聞き流して、日下の名前の考察を始める。どうやらあまり人の話を聞かない人物らしい。日下は助け舟を求めるようにして、堀田に視線を向ける。

堀田は日下の視線に気づいたが、先ほどの仕返しのもりらしく、わざとらしく視線を逸らしてニヤニヤと笑っている。

堀田が視線を逸らしたことにより日下の瞳に映るのは、少年の如く柔らかそうな堀田の頬。

例え相手が成人だろうと、ここまで見事な頬つぺたを目の前に差し出されて引つ張ろうとしないのは、淑女の名折れである。

そう頭の中で勝手に結論を下した日下は、無言実行とばかりに右手を伸ばす。

指先が、目標を捕らえる。

そのときのことを日下は語る。私は神の存在を確信した、と。

感触はマシユマロのごとく、温度は湯たんぽのごとく、伸びるごとトルコアイスのごとし。

まさしく神の所業としか思えないコラボレーションが、そこにはあった。

日下が夢中になってむにむにと神の傑作を弄っていると、その手を掴むものがあった。

無論、それは神器の持ち主だった。

「君は入部しに来たのか、僕の頬を弄りに来たのか、どっちなんだい？」

「多分、どちらでもなかったと思います」

「何だ、入部希望者ではないのか。さては堀田、貴君またるくに説明もせずに連れてきたのだな」

ソファーに座りこんでいた人物が、ようやく立ち上がる。

その姿を見て、日下は幼いころに初めて動物園でキリンを見たときの感覚を思い出した。

座っているときはわからなかったが、とてつもなく、大きい。

この人物を前にすれば、女性としては高身長を誇る天野ですら、平均的な身長に見えることだろう。

「日下波奈だったな。面倒だから日下と呼ぶぞ。私は佐野征十郎、この部の副部長をやられている。よろしく頼む」

佐野征十郎。なんだか厳めしい響きの名である。身長差のために、この男の声は上方から降るようにして聞こえる。しかし、その声はどこか気だるそうで、威圧感を感じさせるようなものではなかった。

「そういえば説明していなかったかな、また忘れちゃってたよ」

「白々しい。入部でも、貴君の頬を弄りに来たのでもないのなら、相談なのだろう。早く説明してやれ、部長殿」

「わかったよ、下っ端。えっとね、日下さん、まず我が部は確かに怪奇現象の相談を受け付けているんだけど、相談をするには、入部してもらった必要があるんだ」

「えっ」

まさかの新情報を中学生が口にする。どこかで聞いたような詐欺

の手口に似たその手法は、日下を大いに混乱させた。

話は聞いてもらいたいけれど、果たしてここで入る部活を決めてしまっているものか。

部活の選択は、謂わば大学生活における登竜門。

この小さなプレハブ小屋が、日下の望む輝かしいキャンパスライフに繋がっているとは、到底思えなかった。

「そんなに難しく考えることはないよ。この部に入ったところで、君の大学生活に支障はない」

日下が眉根に皺を寄せているのを見かねたのか、堀田は取り繕うようにしてそう言った。

日下の眉根がますますよじれる。

「どういことですか？」

「入部しても、ここに来る必要はないということだよ。現にこの部は部員を五十名ほど抱えているけど、来ている奴なんて僕とここにいる佐野くらいのものだ。もちろん兼部もできる」

「来なくても、よいのですか？」

余計に訳がわからない。来なくてよいのなら、そもそも入部させる必要がないのではないか。日下の眉根はよじれによじれ、もはやある種の芸術を形成していた。

これ以上ねじれては、日下の眉根が千切れてしまいかもしれない。そう判断した堀田は、種明かしをすることにした。

「僕達が部員を集めているのは、部費のためだよ。この学校では、月に一度、部員一人につき千円の部費が与えられるんだ。だから仮に入部したとしても、月に一度の所属確認の書類にサインしてくれさえすれば、後はご自由に、ということさ」

「一回やったら後はポイ、ってことですね」
「君は何を言っているんだ」

日下は堀田の説明に自分なりに納得したらしく、腕組みをして大きく頷いている。

堀田は日下に冷めた目線を向けるが、日下は少し頬を赤らめただけだった。

「さて、納得していただいたところで、さっそく相談を聞こうか」
「何故頬を赤らめた？ねえ、何で？」

「堀田先輩うるさいです。話が進まないではないですか」

「そうだぞ、堀田。ガムをやるから噛んでいろ」

「僕がおかしいのか？ガムはもらうけど」

「よし、子供の口が塞がったところで、話を聞かせてくれ」

「はい、あれは昨日のことでした」

堀田がガムを噛む音が響く中、日下は昨日の出来事を二人に話して聞かせた。最初は二人とも真剣に聞いていたようだが、話が進むにつれ、何故か興味を失ったような表情になってきた。

日下の話が終わると、佐野はさもつまらん、とでも言うように鼻で息をつき、堀田はガムを包み紙に吐きだし、丁寧に包んで捨てた。

「欠片も緊急性がないな」

「正直放っておいてもいいレベルだね」

二人して散々な言い様である。堀田に至っては、散々日下を脅して部屋に連れてきた癖に、今はソファーにねそべってだらけている始末だ。

しかし、何にせよ放っておかれては困る。もし毎夜あれが出るのなら、日下は間違いなく睡眠不足になる。そうなればお肌がぼろ雑

巾のようになるのは必至だ。

「助けてくれないのですか？」

「いや、もちろんどうにかするよ。入部してさえくれればね」

「ただ一応、相手を完全に特定しておきたい。先の話で大体正体を絞れたが、一応聞いておきたいことがある。貴君、風呂で寝たり、枕元に油を置いて寝たりする習慣はないな？」

佐野の質問があまりに奇妙であつたため、日下はその言葉を額面通りに受け取つてよいのか迷つた。風呂で寝る？枕元に油？何かの暗喩だろうか。

「率直に答えるなら、そんな趣味はありません」

「うむ、それならよいのだ。貴君に憑いた怪異、我らが解決して見せよう」

佐野は大げさに頷くと、部室の隅にある本棚で調べ物を始めたようだった。

手持無沙汰になつた日下に、堀田が声をかける。

「とりあえず、十時くらいに大学の正門前で会おう。家には帰つて大丈夫だよ。あれは深夜、人が寝静まつた頃にしか出ないからね」

出ないと言われても、やはりあの部屋に一人で帰るのは気が進まない。しかし、今の時刻は午後三時。集合時刻まではまだかなり時間がある。

他に行く当てもない日下は、しぶしぶ帰路につくしかないのだつた。

日下の去つた部室で、二人の男の会話が聞こえる。

「佐野、一応空子さんを呼んでおいてよ。日下さんなら平気かもしれないけど、やはり年頃の女子の部屋に、男二人だけで押し掛けるのは気が引ける」

「貴君は人間に対しては律儀なのだな。その節度を妖怪たちにも持つてやると良い」

「僕の愛に限度なんてないのさ。調節用のバルブはとうの昔に吹っ飛んだよ」

「そんなことだから空子に嫌われるのだ。毎度愚痴を聞かされる私の身にもなれ」

「そうか、空子さんは、家で僕の話ばかりしているのか」

「ポジティブすぎる。時には後ろを振り向くことも大切だぞ」

「後ろだけなんてケチくさいことは言わないさ。僕は三十二方、全方位の妖怪を愛して見せる」

「そうか、ならばもう何も言わん」

押し問答に飽きた佐野が、大きくあくびをする。

壁に掛けられた円形の時計の針は、着実に約束の時間へと近づいていた。

世界は愛と友情によって構成されている

とある大学の校門前に、一人の女性が立ち尽くしていた。

校舎は既に黒色のヴェールをまとっており、月明かりと時折通る車のライトだけが、わずかにその輪郭を浮き立たせていた。

女性は手持無沙汰気に携帯電話を弄っているようだ。

液晶の光が女性の顔を照らしだし、背景の黒とは対照的な白い肌を際立たせている。

不意に辺りに足音が響く。女性は携帯の液晶画面から視線をはずして、物音のした方向へと目を向けた。

闇の中から大小の三つの影が姿を現す。女性は安堵の表情を浮かべると、携帯を閉じて人影へ声をかけた。

「遅いです、二時間も待ちましたよ」

「すまん、しかし約束の時刻は十時ではなかったか？」

長身の男が首をかしげつつ、腕時計を覗き込む。どうやら時計に蛍光塗料が塗られてあるらしく、夜間でも見える仕様のようだ。

時計の針は確かに十の数字を指している。

「あんな家にいつまでもいられるか、私は外で待たせてもらっぞ」

「縁起でもないフラグを立てるな」

「あれ？」

日下はふいに首をひょいとそらし、佐野の脇に控える少女を見る。日下の記憶では、昼間部室では見なかった人物だ。

身長は堀田より少し低いくらい、くせのない黒髪を肩まで伸ばしている。

少女はきりりとしたつり目をしており、気の強い印象を他者に与

えそうだが、赤みを帯びた頬とふわりと笑んだ口元がその印象を中和させ、全体として人好きのする顔立ちを成していた。

しかし、と日下は少女の顔から少し目線を横に移す。

なぜこの少女は側頭部に狐の面を着けているのだろうか。

よく見ると服装もおかしい。薄紫色の布地に彼岸花の模様がはいった浴衣を纏っており、足には赤い鼻緒の黒い浴衣下駄を履いている。

今が春でさえなければ、祭りからの帰りだと言われれば納得してしまいそんな服装だ。

日下に無言で見つめられていることが気恥ずかしくなったのか、少女は日下の方へ一歩進みでると、四十五度のお辞儀をした。

「初めまして、佐野空子と申します、どうぞお見知りおき下さい」

「へあつ、く、日下波奈ですつ。こちらこそ、おしりみてください？」

「君は何を言っているんだ」

少女のあどけない見た目からは予想できない丁寧な挨拶に動揺して、意図せず下ネタを口走ってしまう日下。

堀田は辟易したようにため息をつくが、空子は口元を手の平で隠してクスクスとあどけない笑い声を漏らしている。

「あの、佐野ってことは、佐野先輩の妹さんなのですか？」

場の空気を取り繕おうと、日下は無難な質問を投げかける。意図せぬ下ネタは、概して言ってしまった本人が一番恥ずかしいのだ。

「いいえ、妻です」

だが、帰ってきた返答は核弾頭だった。日下の脳内にキノコの形

をした雲がもわもわと噴出する。

「Lolita-Complex……。」

「おい、今すぐいい発音で不穏なことを呟かなかったか？」

「少し精神疾患について勉強しようと思ひまして」

「ならば何故、私に向かつて半身の構えをとっているのだ」

「少し護身術について勉強しようと思ひまして」

五指を折り、日下はおもむろに空中に掌底を繰り出す。もう二歩踏み込んでいれば、佐野のみぞおちを貫いていたことだろう。すんでのところで静止した一撃に、佐野は生唾を飲み込む。

「待て、貴君は何か勘違いをしている。話し合おうではないか」

「聞いたかい、空子さん。佐野は十五歳以下にしか興味がないそうだよ」

「まさか征十郎様にロリコンの気があったとは。離婚届けを手に入れるにはどうすればよいのでしょうか？」

「煽るな貴様ら！」

煽る外野に、吠える佐野。踊らされる阿呆である日下は、さらなる疑念を込めた眼差しを佐野に向けるが、元々たれ目気味であるせいか、その顔は眠そうな狸にしか見えない。

日下がじりりとにじり寄り、佐野はそのぶん距離をとる。夜闇にまぎれた馬鹿踊りは終わりが無いように思われたが、いい加減に飽きたのか、空子の出した助け舟によってひとまずの決着を迎えた。

「日下様、落ち着いてください。私は合法です。一応あなたよりも年上です。」

日下の疑わしげな視線が、今度は空子に向けられた。空子の外見

は、どうひいき目に見ても中学生程度だ。日下が疑念を抱くのも無理はない。

「それに、あまり私の愛する旦那様をいじめないで下さいな」

しかし、日下の疑念は空子の浮かべた華の咲くような笑顔によって吹き飛ばされた。まさに恋する乙女を体現するようなその表情は、ストレートな言葉とあいまって、まだ肌寒い春の夜を真夏の熱帯夜へと変貌させた。

日下はうなだれるようにして構えを解いた。日下もまた乙女である。それ故に恋する乙女の前では、いかなる障壁も無意味であることを知っているのだ。

堀田は地面に唾を吐き続けている。

「佐野先輩……」

「日下、わかってくれたのか」

日下が佐野にそつと手を差し出した。その様はまるでお互いの健闘をたたえ合う好敵手どうしのようなのだ。佐野も日下の意図を感じ取ったのだろう、爽やかな笑みを浮かべると、力強く日下の手を握った。

「空子さんを泣かせたら、前歯を折ります」

「手を離せ！ 内容が怖すぎて約束できません！」

「クーリング・オフはできませんよ。約束してもらうまで、この手は離しません」

佐野は手を振りほどこうとするが、日下の指は佐野の手の平に力ミツキガメのごとく喰らいついている。再び始まった小競り合いが収束するまでには、少し時間を要した。

「仲が良いのは結構だけど、僕達はここに遊びに来たわけではないんだよ」

互いに肩で息をついている二人を見て、堀田はいさめるような口調で言うが、その口元には邪悪な笑みが浮かんでいる。空々しい言葉とはこういうことを言うのだろう。

「そう思うなら止めるべきだったな。内心楽しんでいただろう、座敷わらしめ」

「褒め言葉だね。なんなら君を幸せにしてあげようか、親友特権だ」
「遠慮しておく、百歩譲っても貴君が運んでくるのは不幸と悪意だ」

佐野が本気で嫌そうな顔をしたのが効いたらしく、堀田は顔をうつむかせて落ち込んでしまった。しかし佐野は決して声をかけようとしなない。あのうつむかせた顔には、ニヤニヤとした笑みが張り付いていることを知っているからだ。相手にするだけ無駄というものである。

「日下、そろそろ貴君の家に案内してくれ。ここにいても時間の無駄だ」

「……わかりました」

先ほどまで騒いでいた日下の表情が不意に硬くなった。これから昨晚の恐怖を再び味わおうというのだ、不安になるのも無理はない。日下の心中を察したのか、空子は彼女の肩にそっと手を置くと、あやすように声をかける。

「日下様、大丈夫です。今晚は我々がついておりますから、なにも心配はありませんよ。必ず、解決してさしあげます」

空子の声は日下の鼓膜を撫でるようにして揺らす。天野からも言われたその言葉は、日下の表情をいくらか和らげた一方で、彼女の罪悪感を再び呼び起こした。

気持ちを割りきれないままに、彼女は我が家への道中を歩みだす。夜はまだ始まったばかりだ。

天井を嘗める変態とその変態を舐める変態

今宵もまた、あの部屋へ。

一個の異形が月夜を跳ねる。

明らかに日常から逸脱したそれは、幾人かの深夜を行く不届き者の視界に入ったものの、誰一人としてそれを気に留めるものはいなかった。

正確には、気に留めることができなかった。

出遭っていないものには知覚すらできない存在。

彼が境界の向こう側の住人であることの証左であった。

その長さゆえに口に収まりきらない舌で、自身の顔ごと唇を嘗める。木にできたこぶのような鼻をひくりと動かし、夜の空気を鼻孔一杯に吸い込む。

怪異は笑う。自らが真性の夜の住人であることを誇るかのように。迫りくる曲がり角を左へ、曲がった先の行き止まりをすり抜け、既に明かりの消えた平屋の軒先を駆け抜け、狭い路地へと到達する。後はこの薄暗い小道を抜ければ、再びあの建物へとたどり着く。異形は全身をたわませると、不意に全力疾走を始めた。音量を増した風が彼の耳元で歓喜の歌を歌う。

彼が降り立ったのは一戸のアパートメントだった。外観は薄い黄色で統一されており、塗装が劣化していないことから、年季のいった建物ではないことが伺える。

玄関にはいくつかの数字と記号がちりばめられたパネルが設置されていた。

正しい数字を知る者以外は、何人たりともその奥へと入ることは許されないのだろう。

彼はそのパネルをつまらなさそうに一瞥した。所詮人でない彼の前では無意味な代物なのだ。パネルに触れることすらせず、異形の

体は閉ざされた自動ドアへと溶け込んでいった。

玄関を抜け、階段を上らず真っ直ぐに、一番目の扉には目もくれず、二番目の扉の前で跳躍し、三番目の扉の前に着地する。そこで異形の足は止まった。

目的の部屋を眼前にして、異形の気分は高揚していた。そもそも怪異として顕現できたこと自体が久々なのだ。その上にこの部屋には自分の求める物が十分にあるし、住人である少女の反応も可愛らしいものであった。自分の足元で震えながら、眠ったふりを続ける少女。久しく得ることのできなかった恐怖心。思い出すだけでも唾液が溢れる。

異形はおもむろに部屋の内へと足を踏み入れた。部屋の明かりはついておらず、ダンボール特有の臭いが彼の鼻孔をかすかにくすぐる。少女の眠る部屋は、何故かダンボールで満たされていたことを思い出した。

彼の心境は歪ではあるが、好きあった少女の家を初めて訪れる少年のそれに似ていた。それ故に。

「はい、確保ー」

「あいさー」

見知らぬ男二人に組み敷かれているこの状況は、彼にとって甚だ遺憾であった。

「ちきしょう！ 美人局か！」

「畜生は貴君だ。こら、暴れるな。怪我をするぞ、私が」

「美人局ってなんですか？」

「住吉三神のことですよ」

「やはり素晴らしい、天井嘗めといったらこの長い舌だね。この

ヌルヌル感、ひんやりとした手触り、ところてんか？　ところてんなのか？　君、うちに来ない？　お金は出せないけど、愛でるよ。それはもう愛でるよ。春夏秋冬問わずに愛でるよ」

「ぎゃあああ、なんか変なのいるううう。よせ、舌は触るな。本当にやめて、やん」

「埒があかぬ！　空子、明かりをつける。堀田は死ね」
「少々お待ちを」

パチリという音とともに、蛍光灯の明かりが暗闇を押しつけて部屋の光景を明らかにした。

白日のもとに晒された光景を、日下は信じることができなかった。確かに、いるとは聞いていた。そして昨晚自分が体験したことも現実のはずだ。

しかし、内心あれは悪い夢だったのではないか、これはここにいる三人が仕組んだ、たちの悪いいたずらではないか、などと考えていたことも事実だ。

日下の目に映る光景は、そんな考えを塵ほども残さずに吹き飛ばしてしまうほどに、鮮烈で、衝撃的で、狂っていた。

黄褐色の肌をもつその生き物は、骨と皮しかないかのような細かい手足を有しており、腹だけが子でも宿しているかのように膨れているために、異様なアンバランスさを醸し出している。

前方に突き出た顎の隙間から生え、線虫のように中空を泳ぐ舌は、人のそれとは違う、グロテスクなまでの赤色だった。

黄褐色の体を取り押さえる人間や、その舌を抱き枕にして頼ずりする人間の存在もあいまって、眼前の状況はどこまでも現実からかけ離れた、趣味の悪いコラージュ画像の様だ。

目の前で、リアルタイムで起こっている出来事でなければ、誰も笑い話にもならない戯言として扱うことだろう。

しかし、これは現実だ。笑い話にもならなければ、感動秘話にすらならない、現実なのだ。

そして、そんな光景を前にして常人が抱く感情は、喜でなく、怒でなく、哀でもなく、楽でもない。

「ひっ」

恐。恐怖心。理解の及ばない、訳のわからない物に対する、原初の感情。

背筋は凍りつき、全身が小刻みに震え、身体が中枢からの命令を聞かなくなる。そんな、感情。

日下の漏らした声とすら呼べないそれは、本当にわずかなものだった。すぐ隣にいる浴衣の少女にすら聞こえない、ましてや離れた位置にいる異形には聞こえるはずもない。

だが、日下が声を発した瞬間に、怪異はピタリと動きを止めた。今まで散々抵抗していたにも関わらず、まるで電池が切れたかのよう。

そしてその停止もつかの間だった。

不意に顔を持ちあげたかと思うと、笑ったのだ。黄色く濁った眼を三日月のように細めて、ぞろりと並んだ歯を見せつけるような、醜悪な笑みを以て。

「お嬢さん、今、恐ろしいと思ったな」

唐突に、無造作に、長い舌を振るう。堀田が玄関から廊下と部屋を遮る扉まで吹き飛ばされた。

次いで佐野の巨体が宙を舞い、堀田に折り重なるようにして叩きつけられる。

異形は悠々と立ち上がると、得意げに天井を一嘗した。

「形勢、逆転、と言いたところだが、お姉さん、そんな怖い目で

見ないでよ。ちびつちまいそうだ」

お姉さんが誰を指すのか、日下にはしばらく理解できなかった。この中で最もお姉さん然としているのは日下であるが、彼女にあれを睨みつける度胸はない。

消去法的に、日下は隣に少し視線を向け、すぐに戻した。間違いない、お姉さんはこの人です。

浴衣の少女には先ほどまでのあどけない雰囲気はもはや欠片も残っていない。頬の赤みが消え、常に浮かべていた笑みが脱落した少女の顔には、およそ感情というものが見受けられなかった。

精巧な日本人形のようなその表情のうち、黒目の中心にわずかに見える、濁った黄色がどこまでも真っ直ぐに異形を捉えている。

「怖い、恐い。分が悪そうなのでとんずらしますよ」

それは当然のように玄関の扉をすり抜けた。もはや日下は驚きの言葉すらあげられない。

阿呆のように口を開けて、立ち尽くすだけだ。

「不味い、逃げられた。佐野、どっちだ！」

「追うつもりか？意味があるとは思えんが」

「いいから早く！」

「ここから大体東南東だ」

「でかした！ 今行くよベイビー！」

ただ、日下が機能停止している間にも事態は動く。

いつの間にか復帰した役立たずコンビの片割れが部屋を飛び出し、もう片方は夫婦でいちゃつき始める。

「空子、貴君キレすぎだろう」

「征十郎様に危害を加えるものには容赦しません。皆塵です」

「そうかそうか、愛い奴め。うりうり」

「はふう」

傍から聞いていると、砂糖を吐きだしたくなるような会話を横目に、日下は一つの懸念を抱いていた。

ここは本当に自分の部屋なのか、と。

願わくば、この混沌極まる状況が悪夢であることを、明日になれば目覚める夢であることを祈る。

説明回だ！ みんな注意しろ！

あれは天井嘗めである、と佐野征十郎は言った。

部屋の主である少女は妖怪について詳しいわけではなかったが、どこかで耳にしたことがある名前だとは思った。

「天井嘗めはその名の通り、人家に入り込んで天井に集った埃を舐める妖怪だ。見た目からは想像できないだろうが、付喪神の一種だ」

日下は未だに自分の身体に体温が戻っていないのを感じていた。その腕は無意識の内に自らを抱くような形になっている。

未だ先ほど経験したことに對して現実感が湧かなかった。

まだもう一人の先輩である堀田正義は戻って来ていない。むしろ彼は戻ってくるのができるのだろうか。

こんな暗闇の中に、あんな化け物を追いかけるために出て行った少年のような大人のことを、日下は思った。

窓から見える景色は黒一色。昨日までは何の抵抗もなくかき分けて歩くことのできたその夜が、今は触れただけで食いちぎられてしまいそうな巨大な化け物に見えた。

「堀田のことなら心配ない。奴はよくああしていなくなるからな」

日下が不安げな顔をしているのを察したのか、佐野は毒にも薬にもならないような言葉を吐いた。

その声色の中に日下を元気づけるという意図は感じられなかった。生徒に淡々と事実を伝えるだけの、ユーモアに欠けた教師の様な口調だ。

日下は返事をしなかった。

「あの手の存在を見たのは初めてと言っていたか。恐ろしいのもわかる。これまで積み上げてきた世界を根底から覆されたようなものだからな」

ただ、と男は言った。

「恐ろしくとも知っておかねばならない。貴君が今後ああいう連中に出遭う可能性は少なからずあるのだから」

佐野の声は穏やかなものであったが、日下の身体は怒鳴られたかのようにビクリと震えた。

懇願するような視線を男に向ける。佐野が今までのことは全部嘘だと言ってくれるのを期待しているのかもしれない。

「あれが、あんなものが、他にも存在するんですか？」

日下の問いに佐野はすぐに答えようとはしなかった。

ふむ、と声をあげ、わずかに剃り残しの見える顎を撫でさすり始める。どうやら佐野にとって、かなり答えにくい問いだったようだ。

「いるといえますし、いないといえませんが」

佐野がいつまでも答えないことに業を煮やしたのか、空子が横から口を出した。

その頬には既に赤みが戻っており、口元にも例のほわほわとした笑みが浮かんでいる。

少し前に見せた氷柱のような冷たさは、今の彼女からは想像もできない。

佐野が申し訳なさそうに弁解するのを手で制すると、少女は滔々と語り始めた。

「言うなれば思い込みなのです。今回この部屋に天井嘗めが現れたのは、他でもないあなたがそう思い込んだから」

少女の話は日下を納得させるには到底至らなかった。あれが自分の思い込みだと言うのなら、この部屋にいた全員が見えていたのは何故か。

そもそも日下は天井嘗めという妖怪について、名前くらいは聞いたことがある、程度の知識しか持ち合わせていない。そんなものの幻覚が見えることなどあり得るのか。

そういつた旨のことを、少女に聞いた。

「幻覚、という少し語弊がありますね。魂魄という言葉があります。魂は精神、魄は肉体を意味しており、人間は魂よりも魄の割合が多い。人間から肉体を奪えば、そこには何も無いと同じ。これは人間の魄への依存度が大きいためののです」

空子は人差し指を立てて、講義をしているような口調で話した。少女の話が理解できないわけではないものの、日下は不満顔だ。答えになっていない、と目で訴えてみせる。

そんな彼女の様子に空子は少し含みを持たせた笑みを見せ、人差し指を左右に振ってみせた。

話はまだ、これからだ、とでも言いたげな様子だ。

「妖怪の場合は、人間の逆。つまり魂がその存在の多くを構成しています。しかし妖怪それ自体は精神を持ち合わせておりません。では、妖怪の魂とは何だと思えますか？」

日下は腕を組んだ。彼女が考え事をするときの癖だ。腕を組むという行為には拒絶の意味合いがあるため、考え事のよ

うな集中力を必要とするときには理にかなった格好であるのかもしれない。

妖怪の魂とは何か。

まず人間の魂とは精神である。妖怪はそれを持ち合わせていない。そして今回この部屋に妖怪が現れたのは日下の思い込みのせいである。

これらの話を統合すると、自と答えは見えてくる。

「人間の、精神ですか」

おや、と空子は整った両眉を動かした。どうやら日下が答えられるとは思っていなかったらしい。特徴的なつり目が悪戯っぽく輝いている。

「正解です。よくわかりましたね」

「考えるのは得意ですから」

日下はえへんと薄い胸を張った。彼女の現在の服装は薄手のワンピースであるので、女性としては強調されて然るべきものがあるのだろうが、その点彼女は実に謙虚である。

「妖怪は人間の精神、主に恐怖のような負の感情を魂とします。そのためあれらは負の感情に引き寄せられるのです。今回は日下さんの新生活に対する不安を目当てに寄って来たといったところでしょうか。故にあなたの思いがなければ、天井嘗めなどいないも同じというわけです」

空子の説明に日下はうんうんと相槌をうった。一応は理解できたらしい。

しかし彼女の頭には一つの疑問が浮かんている。妖怪が人間の精

神活動で出現するのなら、巷にはもつとそいつた存在がありふれているのではないかというものだ。

感情を露わにすることは、なんら特別なことではない。生きている人間ならば存在して当然のものだ。

日下もこれまで泣いたり怖がったり、嘆いたり怒ったりしたことはあるが、さっきのような化け物を見たのは今回が初めてだ。

この疑問について、今まではきはきと話していた空子が初めて言葉を濁した。

「あー、やっぱそれ聞きますか。まあ当然気になりますよね。そのことは私も気になっていたのです」

「空子さんも、ですか？」

「正直わからないというのが現状です。今回だけでなく、最近のこの街はおかしい。怪異の出現率が異常なのです。我が部はそれなりの数の部員を抱えているのは御存じですね？ あれ、部長と副部長を除くと全員怪異の相談で入部した人達です」

聞いた話では部員の数五十名程度。つまり、この街だけで五十件近くの怪異がらみの事件が起こっている計算になる。

「本来怪異と人間が出遭うには様々な条件が必要です。普通に暮らしていて怪異と出遭うことなどまずありません。それだけにこの出現回数があり得ないと言つてよいでしょう。誰かが仲介していない限りは」

「親玉がいるということですか？」

「あくまで推論ですが、おそらく」

妖怪の親玉がいて、子分をけしかけて人間を襲っている。

現実味の欠片もない与太話だが、実際経験してしまった日下としては笑えない。何者かに覗き見られているかもしれないという普段

は考えもしないような不安に駆られ、思わずベランダに続く大きな窓の方を見る。

果たしてそこには、部屋の中を覗き見る者がいた。

妖怪ホイホイ

「堀田先輩、いい加減機嫌直してくださいよ。気付かなかったのは謝りますから」

「そうだと堀田。いつまでも不貞腐れていては本当に子供みたいに見えるぞ。ほら、飴をやるう」

「どっちにしる子供扱いしてないか？ まあ飴はもらうけど」

ベランダに現れた人影は堀田正義だった。アパートを飛び出した
はいいものの、戻って来たときにオートロックを開けることができ
なかったため、ベランダ側へ回って来たらしい。

何度も窓を叩いたのに誰も気づかなかったため、無視されたと拗
ねているようだ。

「わかるかい？ みんなが部屋の中で談笑している中、一人だけ外
に閉め出された僕の気持が」

「勝手に出て行ったのは貴君だろうに。ほら、飴をもう一個やるう」
「僕はそんなじゃ誤魔化されないぞ。飴はもらうけど」

口は強情を気取っているものの、二個目の飴を口に入れたときに
堀田の表情が緩んだのを佐野は見逃さなかった。堀田は昔から甘味
に弱いのだ。

佐野は堀田を手なづける為に常に三百円分の菓子を持参するよう
にしている。

「それで、奴は見つかったのか？」

「うん、捕まえてもう来ないように約束させた」

「妙に手際がいいな。信用できるのか？」

「うん、友達に手伝ってもらったから。まず大丈夫だと思うよ」

カロン、コロンと堀田の口からリズムカルな飴を転がす音がした。どうやら機嫌を直したらしく、少年のような笑顔を浮かべている。

日下が熱烈な目で堀田を見つめながら口を手で覆っているが、その理由はきつと誰もわからないだろう。

「日下さん。とりあえずさっきの妖怪は被えたけど、今後怪異の再発を防ぐために明日もう一度部室に来てくれるかな？ 渡しておくものがあるんだ」

「わかりました。堀田先輩の家に行けばいいんですね？」

「部室だつてんだろ。何で君はそんなに息が荒いんだ」

ふへへ、と日下は声を漏らした。堀田が戻って来たことによつて緊張の糸が切れたのか、その口調は先ほどまでと比べて幾分か明るい。

「用も済んだ訳だし、そろそろ帰ろうか」

「え？」

しかし、堀田がおもむろに立ち上がつて言つた一言により、日下の声のトーンは幾分か下がることになる。

「帰っちゃうんですか？ 私を一人残して？ 正気ですか？」

日下が必死の形相で堀田の服の裾を掴む。まだ一人になるのは恐ろしいのだろう。堀田はその様子を見て少し悩んだようだったが、やがて時代劇的一幕のようなそぶりで彼女の腕を振り払い、ニヤリと笑った。

「悪いが僕らはこれから大人の時間を過ごさないとならないのでね。

いつまでも君のようなお子様の相手はしてられないんだよ。」

「なっ、子供のくせに、子供のくせに……」

「はっ、なんとも言う方がいいさ」

「おい、堀田……」

「佐野は黙っててくれ。そうだな。どうしてもというのなら、今日のところは空子さんに泊まってもらうといい。女性同士だし、丁度いいだろう」

「そりゃ私はいいですけど、空子さんの都合があるでしょう」

「私は構いませんよ。征十郎様が許可すれば、ですが」

女性二人の眼が、長身の男を射抜いた。問いかけるような視線と訴えるような視線。男の視線はその間をメトロノームの如く右往左往したが、やがて決心したのだろうか、一方で停止した。

「空子、すまないが今日のところは彼女と一緒にいてやってくれないか？」

空子は眼を細めてしばらく佐野を見つめていたが、最後には小さくため息をついて「わかりました」と言った。佐野は小さく頷くと、堀田と連れ立って部屋を出た。

「よかったのかい？　彼女は君と一緒に帰りたかったようだけど？」

帰りの夜道、堀田は独り言を呟くかのようにして佐野に問うた。未だ飴を舐めきっていないらしく、口からは飴玉を転がす音が聞こえる。

「貴君が言うのか。空子をあそこに留まらせたがっていたのは貴君だろうに」

「あれ、そうだったかな」

堀田のおどけた声に佐野が顔をしかめた。空子に泊っていけと言ったのは佐野であるが、それは堀田に何らかの意図があると思つての発言である。空子は一度へそを曲げると非常に面倒くさいのだ。できることなら機嫌を損ねるような行動は避けたい。

不意に佐野の前を歩いていた小さな影が立ち止った。月明かりに照らされた顔はクリスマスプレゼントを見つけた少年のような笑みを浮かべている。

「冗談だよ、本当は話したいことがあつたのさ。二人きりでね」

「気色の悪い言い回しをするな。つまらない内容だったら空子の機嫌を直すのを手伝ってもらうぞ」

「それは君の仕事だろう、旦那様。話というのはだね、日下さんを我が部の常駐部員にしたいんだ」

「それはまた、何故だ」

一寸、辺りが暗幕に覆われた。どうやら月が雲に遮られたらしい。頼りない街灯の明かりだけが唯一の光源となる。堀田の表情は伺い知れない。

「彼女は、極上の餌だ」

そう言い放った堀田の声はどこか狂気じみていた。

「いや、正直驚いたよ。まさか本当にあんな存在がいるだなんてさ。彼女は境界そのものだ。今まで怪異に遭ったことがないというのが信じられない」

「堀田、貴君は一体何を言っているのだ」

「彼女は、妖怪を呼び寄せるんだよ。そこにいるだけでね」

月明かりが再び射しこんだ。笑っていたはずの堀田はいつのまにかその表情を失くしており、無機質な視線だけが佐野を見つめていた。

「ここまで言えばわかるだろう？　彼女が我が部にどのような利益をもたらすか」

「待て、貴君は何故そう思うのだ？」

「なんとなくさ。でも彼女がそういった力を持っているのは間違いないよ」

「仮に彼女がそういう力を持っているとして、貴君は彼女を餌に使うつもりなのか？　さすがにそれは看過できんぞ」

「どうしてだい？　例えば日下さんが入部しなくても妖怪は彼女の前に現れるんだよ？　だったら僕達が近くにいた方がいいんじゃないかな？」

詭弁だ、と佐野は思った。日下を守ることに異論はないが、それは彼女を餌にしているいい理由にはならない。だが、いずれにせよ彼女を守るためには眼の届くところに置いていた方がいいのは事実だ。佐野の葛藤を見透かしているのか、堀田は小さく笑い声を漏らした。

「わかった。彼女に入部してもらおう。ただし説得は貴君がやれよ」
「え、手伝ってくれないの？」

「私は正直あまり乗り気ではない。だから貴君一人でやれ」
「無責任な副部長だなあ。わかったよ」

堀田はわざとらしく舌打ちをすると、佐野から顔を背けて再び歩き始めた。佐野もその後ろを大きな影をひきずって歩き始める。

二人は岐路での別れの言葉まで、口を開くことはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6777m/>

境界遊戯

2010年10月13日19時12分発行